百合物語

有華 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
百合物語

【Ｎコード】
Ｎ９２１２Ｆ

【作者名】
有華　桜

【あらすじ】
男子禁制のとある学園に通うごく普通の少女、久遠慶子。彼女をとりまく個性溢れる少女達と、次々に起こる不思議な出来事。一週間前の『あの日』以来、久遠慶子の日常は一変してしまった――。有華桜の最新作、学園ミステリの新境地！「さあ、物語を始めましょう？」

1／生徒会長（前編）

放課後。
クラス担任の女教師、瀬多川刹那のあっさりとした彼女らしい終業の挨拶を終えた後、一学期最後になる教室を感慨にひたりながらのんびりと眺めて、誰よりも遅く廊下に出たところで――偶然にも、私はよく見知った人物と出くわした。
「出てこられるのが少しばかり遅過ぎませんか、久遠さん。それとも、わたくしが教室の前で待ち伏せていることを見越して、わざと焦らすような真似をされていらしたのではないでしょうね？」
前言撤回。
待ち伏せされていた。
「えっと、あの、榎本先輩。色々と突っ込みどころがありすぎて、どこから突っ込んでいいのか判断に困ってるんですけど、ひとつずつ聞きたいんで答えて貰えます？」
榎本恵理華。
黒く艶のある腰付近まで伸びたロングヘアに、細い眼鏡の似合う三年生。
彼女を簡潔に一言で表現するなら、『どこか抜けてるエリート生徒会長』だろうか。
「よろしい。どうぞ」
突っ掛かってくることもなく承諾。
こういうところは素直なんだけどなあ。
「えっと、まず始めに。生徒会長がこんな場所をうろついていて大丈夫なんですか？」
「問題はありません。些事は他の方達に任せてありますし、自分の仕事は全て終わらせています」
「じゃあ次の質問です。一体全体、どれだけの間そこで待ってたんですか？」

「そうですね。恐らく十分程度かと」
「……、最後。なんで最初から教室に入ってこなかったんですか？」
「あら。それはそうですね」
どうしてそこが抜けてるかなあ。
さっきまでは一人で静かにぼおっとしてたかったし、私としてはまったく問題ないんだけど。
それにしても、こんな場所で十分間も待たせてたなんて、本来生まれるはずのない罪悪感が芽生えそうだった。
「久遠さん。それよりも、わたくしがこうして待ち伏せしていた理由について質問されるべきではないかしら？」
それはそうだ。
頭が良いのか悪いのか、判断に困る人である。
「じゃあ聞きますけど、どうしてこんな場所で私なんかを待ってたんですか？」
「久遠さん。『私なんか』などという言葉で自分を卑下されてはいけません。少なくとも、わたくしは貴女を高く評価していますよ？」
「はあ、それはどうも」
なんだか会話のキャッチボールが成立していない気がする。
「榎本先輩の私に対する評価はありがたく戴いておくとして、とりあえず、私への用事があるなら教えて貰えません？」
「まあ特に用事という用事はありませんでしたけれど、強いて言うならひとつ頼みごとがあります」
「そういうのって、用事がなかったとは言わないと思うんですけど」
「いいえ。これは今しがた思い付いたことですから、元々用事がなかったとはいえ、頼みごとという用事はできたことになります」
なんだか凄い屁理屈だった。
というか用事もなく私を待ってたのか、この人。
「はあ。それで、その頼みごとってなんです？」
「久遠さん、放課後はお暇ですか？」
質問に質問で返答された。

もしかしてこの人、私とまともに会話をするつもりがないんじゃないだろうか。
「いえ、まあ、特になにも用事はないので暇と言えば暇ですけど」
「それは丁度良いですね。では久遠さん、わたくしとデートをしませんか？」
「私、一応性別で言えば女ですよ？」
「それがなにか？」
「デートって普通、男と女が付き添って街中を歩き回りながら買い物したり、映画を観たりして遊ぶことだと思うんですけど」
「そのデートをしましょうとお誘いしているのです」
「だから、私は女で榎本先輩も女でしょうと」
「そのようなこと、この学園が女子高なのですから仕方がないではありませんか。些細な問題です」
この学園が女子高で男がいないからって、言葉の意味まで捻じ曲げるつもりなのか、この人……。
そろそろ疲れてきた。
「それで、どうなのですか？　デートをして下さい、とこのわたくし自らお誘いをしているのですよ。もちろん、断るようなら夏季休校中も補習授業という名目で、わたくしと毎日顔を突き合わせることになるでしょうけれど」
「行きます。いや、行かせて下さい」
休みがなくなることよりも、毎日この人と顔を突き合わせることに恐怖を感じてしまった。
好意があって悪意がないのか、悪意があって好意がないのか、判断に苦しむ相手だなあ。
好意があって悪意もあるのかもしれないけど。
デート、ねえ。
「えっと、あの、榎本先輩。デートって言いますけど、ただ単に私と遊びたいとかそういう理由では、もちろん、ないんですよね？」
「あら。久遠さんは、わたくしが単純に遊びたいという理由でデー

トのお誘いをしない、などと勘違いされているのではありませんでしょうね」
「もしかして、本当に私とただ遊びたいだけなんですか？」
そうだとすれば、それはやっぱり一言でいうと、意外だろう。
「もちろん、違います」
「ですよね……」
もちろん違うらしい。
なんだか騙された気分だった。
「じゃあやっぱり何か理由というか、私に用でも？」
「そうですね、それは目的地に着いてからのお楽しみ、ということで」
口元に人差し指を当てて、チャーミングに言う生徒会長。
そんなこんなで、私こと久遠慶子は半ば強制的に拉致される形で、生徒会長こと榎本恵理華とデートをすることになった。

◆

榎本先輩と待ち合わせ場所、時間を決めてから校門前で別れ、着替える必要もあることだし、私はひとまず自宅へと帰ることにした。
帰宅途中にやたら元気の良いスポーツ少女と出逢ったり、帰宅後はうざったいぐらいに姉懐っこい弟を相手にしたりなどもしていたけど、ここではとりあえず省略したいと思う。
今回はあくまで、生徒会長こと榎本恵理華と、私こと久遠慶子がデートをすることになった日のお話だ。
――さて。
私が自宅に帰宅してから数十分後。
着替えを終えて玄関を後にし、可愛げもないボロっちいママチャリに乗って走ること数分。
榎本先輩との待ち合わせ場所である、街の中心にある駅前へと辿り着いた。

人ごみは少ない。
この辺りでは珍しい光景だった。
私は駅の近くにある駐輪場までママチャリを運ぶと、チェーン型のカギを適当な柵にひっかけて、そのまま徒歩で駅前周辺をうろつくことにした。
待ち合わせ時間よりは十分以上早いけど、見るからに律儀そうなあの生徒会長のことだ、当然のようにすでに到着していそうである。
榎本先輩は、デートだと言っていた。
なにか目的があるのだろう。
だけど、やっぱりデートだなんて言われたら、私が男でなくとも緊張してしまうのは無理もないと思う。
話をしていて疲れるのは確かだし、やけに絡まれて面倒だと思っているのも事実だけど――それでも
榎本恵理華という存在は、この私を含む学園の生徒達からすれば、手が届かない場所にいる人だから。
そんな榎本先輩が私とデートをするという。
女子高だけに、彼女は他の生徒からも信頼が厚い。
むしろ信仰というべきかもしれない――とてもではないが、私みたいな平凡な人間からしてみれば縁のできようがない人物なのに。
それでも、私は彼女と知り合った。
全ては一週間前に起こった『あの出来事』のおかげ、と言うべきだろう。私と榎本先輩は、あの日に出逢い、こうして知り合うことになったのだから。
いつもはできる限り出逢いたくはないけど、もし一生逢えなくなるとしたら、それはやっぱり悲しいだろう。
簡単に説明してしまえば、私と榎本先輩の関係はそういうものだ。
だけど、少なくともこの一週間でこうしてデートに誘われるほど仲が良くなったとは思えない。私が一方的にそう思い込んでいるだけかも知れないけれど、やっぱり、なにか目的があるのだろうと勘繰ってしまう。

目的地に着けば、その疑問――というよりは、不安に近い――は、解消されるのだろうか。
「あら。早いのですね、久遠さん」
色々と考え耽っている時に、背後から聞き覚えのある声が聴こえてくる。
私は振り返り、返答をしようとしたところで、思わず自分の目を疑った。
確かに初めてだけど。
それでもこれは、かなり衝撃的な光景である。
「わたくし、今しがた着いたばかりですが、どうやらお待たせしてしまったようですね」
「えっと、あの、榎本先輩……ですよね？」
思わず本人確認。
一つ二つ前の彼女の台詞を聞けば、本人かどうかぐらいは判断がつくだろう。
けれど、今の私にそんな余裕なんてなかった。
「ええ。わたくしは正真正銘、榎本恵理華ですよ？」
なんていうか、そう。
ゴスロリだった。
単語の意味が解らないなら省略せずに言おう。
ゴシックロリータだった。
「どうしました？　久遠さん。口をぽかんと開けられたままで」
いやまあ、確かにあり得ない話ではなかった。
私は、この目で一度たりとも、榎本先輩の私服姿を見たことがなかったのだから。
それが特殊な、というかもうマニアックすぎてドン引きしてしまうぐらいおかしな私服姿だとしても、それは驚けどもあり得ないことではない……！
「それより榎本先輩こそさすがというか、早いんですね。まだ――」
まだ〇〇分ですよ、なんてお決まりの台詞で誤魔化そうと携帯電

話の時計を見たら、すでに約束の時間から五分も過ぎている。
「……いえ、なんでもありません」
思いっきり時間にルーズだった。
私が色々と考え耽っている間に、待ち合わせ時間を過ぎていたらしい。
出会い頭、榎本先輩の台詞を思い出す。
もうなにも考えないことにした。
「そうですか。それでは、さっそく向かうと致しましょう」
榎本先輩はそう言って私の隣までやってくると、するり、とこなれた手つきで私の左腕に自分の右腕を絡ませる。
ゴスロリに腕を組まれてしまった。
「ちょ、ちょっと榎本先輩。さすがにほら、私達って女同士だしこういうのは……」
「いけない、というのですか？　デートだと初めに断っておいたはずですよ？」
「いや、それはそうなんですけど」
「でしたら問題ありませんですよね。さあ、早く行きましょう、久遠さん」
どうあがいたところで引き下がるつもりはないらしい。
仕方がない、で済ませたくはないんだけど。
やっぱり、仕方がないみたいだった。
明らかに異端な服装の榎本先輩と、至って普通な服装の私という組み合わせは、どうあがいたって浮いてしまうのは明白である。
酷い羞恥プレイだよ……。
「ところで、どこへ向かうんですか？」
私は全てを諦めたところで、気を取り直して質問してみる。
目的地にいけばデート紛いの罰ゲームも終わるんだろうし、さっさと済ますことを済ませて帰りたい気分だ。
「そうですね。特に隠す必要もありませんので答えますと、まずは服を買いに行きます」

「服っ！？」
思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。
だって、ゴスロリが服屋だよ……？
もしかして、これから私はもの凄くマニアックな場所に連れていかれるんじゃないだろうか。
ていうか、聞き間違えじゃないなら『まずは』とか言ってなかったか、この人。
「ああ、服で思い出しました。久遠さん」
なぜか急に嫌な予感が。
「なんですか、榎本先輩」
私の左腕に胸を押し当てながら抱き付いている榎本恵理華は、普段の彼女からは想像もできないくらい可愛らしい笑みを浮かべながら、
「今日のわたくしのこの服装、いかがでしょう。思い切り気合いを入れたつもりなのですけれど、似合っています？」
その瞳には、もはや純真さしかなくて。
私はただ「似合ってます、可愛いですよ」なんて、心にもないことを答えるしかなかった。

◆

今日――待ち合わせ時間から二時間が経過した今までの、私こと久遠慶子と、ずっと私の左腕に抱きついて離れなかった榎本恵理華が行ってきた行動を、単純に一言で表すとするなら。
それはまさに、ただのデートだった。
榎本先輩に腕を引かれながら服屋を見て回り、予想通りにマニアックなコスプレ専門店らしき場所にも入り、その辺りからすでに投げやりになっていた私は、その後も榎本先輩の行きたがる場所に黙って付き添っていた。
特に私はなにもしてないけど。

それでも、榎本先輩はどこか楽しそうだった。
今日の街中はなぜかあまり人気がなくて、それでも色んな人が歩いていたことに変わりはないけど、まあ、いつもの街中を歩くよりはまだマシだっただろう。
そうして、現在。
これもやっぱり榎本先輩に連れられて、駅近のファーストフード店で夕飯を取っていた。
なんていうか、私は初めから所持金がなかっただけで、榎本先輩は財布にいっぱいぎっしりと紙幣が詰まっていたらしいのだが、それらのほとんどがこれまでの買い物で飛んでいってしまった。
そんなわけで、ファーストフード店。
というわけなんだけど。
私はようやく落ち着いたところで、そろそろ肝心なことを聞くべきだと思い至る。
「えっと、あの、榎本先輩。少し質問してもいいですか？」
「ふぁい？」
「すいません。食べ終わってからでお願いします」
ほんと、学園でいるときとはまったく印象が違うよなあ、この人。
服装が一番そうなんだけど。
こうして眺めていると、女である私でも素直に可愛いと思えてしまう。
「ん……、ごくん。はい、なんでしょう。久遠さん」
「ああ、その。今日は私と遊ぶ為だけにデートなんてしてるわけじゃないですよね」
「デートはデートですよ、久遠さん。少なくとも、わたくしはそのつもりですけれど」
「いや、でも言ってたじゃないですか。それは違う、って。目的地に着けば教えて貰えるみたいですけど、その目的地って一体どこにあるんです？」
それが一番気になっていたこと。

そして、今日、本来の目的でもあるはずだった。
「気が早いのですね、久遠さんは。もう少し今を楽しんでもよろしいでしょう？」
「えっと、それはつまり、この後に行く予定があるんですね？」
私がそう言うと、榎本先輩はなぜか苦そうな表情を浮かべた。
「ええ、もちろんです」
彼女はそれだけ答えて、残ったポテトをつまみ始める。
この時から――私の勘違いでなければ、これまでの嘘みたいな笑顔を浮かべていた榎本恵理華は、もういなかった。

◆

ファーストフード店を後にして、私は再び榎本先輩に連れられながら、目的地と呼ぶ場所へと向かっていた。
デート気分はこれで終了、ということなのだろうか。榎本先輩の右腕は、もう私の左腕には絡んでこない。
どこか重苦しい空気だった。
私がなにか気に障るようなことでもしてしまっただろうか――なんて考えもしたけれど、そんな様子ではなく。
榎本先輩が、真面目ないつもの生徒会長に戻った。
恐らくはそれだけなのだろう。
目的地へは徒歩で向かえるらしく、街をうろつくのと変わらない足取りで歩を進めていく榎本先輩と、それにただ黙ってついて行く私。
服装は相変わらずのゴスロリなのに、どうしてこうも空気に違いがあるのだろう。それとも、ただ私が慣れてしまったんだろうか。
時刻はすでに午後七時を過ぎていた。
夕日は落ちかけていて、いつ暗くなってもおかしくない時間帯。
これから向かう場所がどんなところかも聞けないまま、女の身である私としては不安も少なからずある。

「少し、いいでしょうか」
ふと、私の前を歩いていた榎本先輩が、くるりとこちらへ振り返ってそう言った。
あまりに急だったせいか、私は上ずった声で「は、はいっ」なんて答えてしまう。
「久遠さん。一週間前のこと、覚えていらっしゃいますよね？」
「えっと、覚えてますけど。それがなにか？」
「ええ。ずっとお聞きしようと思っていたのですが、あまりにも現実味がなくて言いそびれていたのです。その、一週間前のあの日から今日にかけて、なにかおかしなことはありませんでした？」
おかしなこと？
いきなり突拍子もない話題を振られてしまった。
「えっと、少し意味が解りません」
「ですから、おかしなことです。言葉通り、と言ってしまって間違いはありませんが……。その様子からすると、久遠さんはなにもなかったようですね」
「榎本先輩、一体なんの話を……？」
「いえ、解らないのなら問題はありません。むしろ、知らないほうがいいこともありますから」
一週間前――。
あの日の出来事は、確かに『おかしなこと』に分類されてもいいぐらいだけど、それから今日にかけてなにかあったかなんて、わけが解らない。
榎本先輩には、あれから別の『おかしなこと』があった、とでも言うのだろうか。
「あら、話している間に。着きましたよ、久遠さん」
榎本先輩がそう言って、目先にある場所を指す。
そこは私にも見覚えのある場所だった。
「あそこはもしかして、あの時の……」
その場所はひとつの廃れた公園。

遊具なんて滑り台とブランコぐらいしかなくて、子供一人さえ見当たらないような、そんな小さな公園。
一週間前に私と榎本先輩、そしてクラスメイトの柚木善深の三人が偶然にも出逢い、そして――
「わたくしは、毎日のようにこの場所を思い出していました。いえ、正確には……夢見ていた、というのが正しいでしょうか」
「夢を？」
「ええ。そして、いつもその夢には貴女がいたのです。久遠さん」
「私が……。それは、あの一週間前の？」
「いいえ、違います」
すっぱりと言い放って、榎本先輩は公園へと脚を踏み入れる。
私も黙ってその後を追っていく。
「最初は、一週間前のあの事を夢の中で思い出しているのかと思いました。けれど、そうではないことに気が付いた。夢の中には柚木さんの姿はなく、あの子もいなかった」
そこにいたのは貴女だけなのです、と。
言葉にせず、けれど意思を持った瞳で、私へとそう訴えかけてきた。
「次第にそれは、ただ久遠さんのことを夢見ているのだと思い至りました。そしてその日からずっと、わたくしはできる限りの時間を使って、久遠さんとお話をすることにしました」
「それって……」
つまり、ここ最近やたらと榎本先輩に絡まれるようになったと思っていたのは、そういうことだったのだろうか。
全ては夢のお告げだ、と。
「そして、今になってわたくしは確信できました。勘違い、という言い方はあまり好ましくはありませんが……。やはり、わたくしが久遠さんに対して好意を持っているわけではなかった、と」
「今日こうして私とデートをしたのは、毎日のように見る私の夢が恋心なのかどうかを確かめる為だったんですね？」

「ええ、その通りです。夢に見ていたのは貴女ですが、貴女だけではないことも確かだったのですから」

公園。

一週間前の出来事を象徴していると言ってもいい、数少ないキーポイント。

「この場所と貴女。その二つを夢に見続けていたわたくしは、どちらに惹かれているのか解っていなかった。もちろん、久遠さんのことは好きですよ。いいえ、この数日間で好きになったと言ってもいいでしょう。けれど、それもあくまで友人としてです。ならば答えはひとつしかない」

惹かれていたのはあくまで公園の方、だった。

これはそれだけの話なのです、と。

榎本恵理華は、どこか悲しげな表情で空を眺めながら呟いた。

「いつも同じ夢でした。わたくしが公園を眺めていて、そこにはいつも貴女がいる。それは本当に一瞬の刹那のようで、永久に続く時間のようでもありました。どうしてそこに久遠さんがいるのかは解りません。けれど、それもきっと一週間前のあの日に貴女がいたから。深い理由なんてない、それだけなのだと今は思えます」

それだけ、という言葉。

なぜか私はその言葉に引っかかるものを覚えて、でもその正体が掴めなくて。

塀に囲まれた公園を眺めてみる。

今にも取り壊されてしまいそうな公園。入口からまっすぐ進んだ場所にはブランコがあって、四角い敷地内の隅に小さな滑り台がひとつ。その滑り降りた先には砂場があって、けれど誰かが遊んでいるわけでもなく、砂場はただ平らになっていた。

辺りは静かだった。二つあるブランコにそれぞれ腰掛けながら、私と榎本先輩は空を眺めていた。

会話はない。

ここへ来た理由も、これまでのことも。

全てを聞いて、私はなぜかなにも言うことができなかった。
学園生徒のトップ、生徒会長。
榎本恵理華が抱いていた幻想は、今ここで全て明らかになったのだから。
「……、あれ？」
ふと気付く。
確かにほとんどの疑問は払拭された。
今までどうして執拗に絡まれていたのか、デートの理由、そして今日の目的と目的地。
全てに納得してしまって、肝心なことが抜け落ちている。
「どうしました、久遠さん？」
左隣でブランコに揺られながら、平然とそう問い掛けてくる榎本先輩。
私は思わず立ち上がって、彼女へと向き直る。
「おかしなこと、ですよ」
「え？」
「榎本先輩、私に聞きましたよね。『なにかおかしなことはなかったか』って。それってどういう意味だったんですか？」
「それは、変な夢を見られなかったかどうか……」
「変な夢を見るだけのことが、『おかしなこと』なんですか？」
「……」
「毎日のように夢を見ていたんですよね。この公園と私の夢。一週間前の出来事のせいで公園のイメージが強いことは解るんです。でも、やっぱり説明がつかないところはある」
それは、どうしてこの私が毎回登場しているのか、ということ。
久遠慶子が榎本恵理華にとって恋するほどの対象ではない、と彼女は確信するように言い切った。
ならば、それ以外の理由がなければ説明がつかない。
私が榎本先輩の夢に出ていた理由。
そして、その私に『おかしなこと』がなかったか、と問う榎本先

輩。
「あまりに現実味のない話をしても、久遠さんはに信じては貰えない。そう思って黙っていようと決めていましたが、わかりました。そこまで言われるのであればお話致しましょう」
「おかしなこと、ですね？」
「ええ。と言っても、やはり突拍子もないようなことなのですけれど。久遠さんは夢を見ていらっしゃらないと言いますし」
「構いません。なんですか？」
「その、どう言えばいいのでしょう。久遠さんは、自分が二人いる……なんて感じられたことはありませんか？」
「は……？」
それは、あまりにも意味が解らない言葉だった。
「一週間前のあの日からなのですが、わたくしは時間のあるときはできる限り久遠さんとお話をしようと思っていましたので、ストーカーとは言いたくありませんが、それに近いようなこと……つまり、久遠さんの動向について色々と調べたりしていたのです。しかし、どうにもおかしな部分が多々あるのですよ」
「おかしな部分？」
「一番最近のことだと、今日の放課後になります。久遠さん、誰もいなくなるまで教室にずっといましたよね？」
「それは間違いないですけど」
「でしたら、わたくしと放課後にお話をする約束をしたことは覚えていらっしゃいますか？」
話をする――約束。
そんなもの、した覚えはない。
「覚えがないという顔ですね。まあ、まさかとは思ったのですが。しかし、確かに今日の昼休みにわたくしは直接、久遠さんと約束をしているのですよ」
「昼休みって……私、食堂には一人で……」
「一緒に行きましたよ。覚えていらっしゃらないのですか？」

「え？」
「一緒に行って、一緒に学食を食べました。二人ともAランチです、間違いありません。そしてその時、放課後にお話をしましょうと約束しました。わたくしが迎えに行きますので、久遠さんのクラス前の廊下で待ち合わせしましょう、と」
Aランチなんて食べてない。
私が今日食べたのはコロッケパンだ。
完全に話が噛み合っていない。
どこか、ズレている。
「放課後、教室の前で約束通り十分ほど待っていたら、教室の扉が開きました。わたくしの顔を見たときの久遠さんの驚かれるような表情を見て、これまでの経験からわたくしは勘付きました」
久遠さんは二人いるのだ、と。
本当に現実味のないことを、彼女は言った。
「いじわるで、わざとわたくしを待たせていたのでは、とも考えました。ですが、最初の久遠さんの一言でそれはないと思い至りました」
「……、そんな」
「久遠さんは何も覚えていない。いいえ、恐らく知らないのだとわたくしは考えました。ですから全てを知って貰おうと思いました。けれど、やはり久遠さんは何も知らない。それなら知らないまま、全てわたくしの勘違いだったと自分に言い聞かせて、なかったことにしようとしたのです」
でもそれはお節介だったようですね、なんて。
本当に申し訳なさそうな顔をして、榎本先輩は私に告げた。
「わたくしの夢。久遠さんがそこにいることにはなにか意味があるのではないか。わたくしにしかできないことがなにかあるのではないか。そう考えることもやめるつもりでした。いえ、それは今でも変わりません。きっと、わたくしの夢は関係がないのだと思います。夢は所詮、夢に過ぎません。偽りの幻想を信じて、他人に干渉する

べきではないのだと理解しましたから」
全てはわたくしの勘違いなのだ、と言う。
とんでもない。
勘違いしていたのは私の方だ。
エリート生徒会長の名は、伊達ではなかった。
榎本恵理華という人間は――正真正銘、本当の意味で、私なんかじゃ到底及ばないレベルの存在だったのだから。
服のセンス以外、だけど。
「私が二人いる、か……」
さて、どうしたものだろう。
少なくとも学園内に久遠慶子という名前の二年生は私しかいないはずだ。それに、榎本先輩が見間違うほどの似た者同士。そんな存在は、やっぱりあり得ない。
「……二重人格、なのかもしれませんね」
私が答えを口にする前に、榎本先輩がひっそりとそう呟いた。
二重人格。
記憶にないことを喋っている可能性。
「もし私が二重人格だとして、それなら全て説明がつくんですか？」
私は核心的な部分を問い掛ける。
榎本先輩は言っていた。
私の動向におかしな部分が多々あるのだ、と。
それは、私自身の言動や記憶の食い違いだけでは済まないことだ。
二重人格では説明をつけられない。
「確かに目撃証言のズレはあります。明らかに同時刻、別々の場所に久遠慶子という人間が二人いるとしか思えない証言です。ですが、それはあくまで目撃証言であって、他人の言葉です。わたくしだってそうですし、そういう証言は信用できるものではありませんから」
「けれど、それは一度きりじゃないんですよね？」
「それは……」
「榎本先輩、言ってましたよね。おかしな部分が多々ある、って。

それって、何度もそういうことがあった、ってことですよね？　他人の証言は確かに曖昧かもしれない。けれど、それが何度も繰り返されたら事実になる。だからこそ、榎本先輩は確信したんでしょう？」

私が二人いる、と彼女は言った。

そんなこと、普通じゃとても信じられない。

だが、それでも榎本恵理華は確信した。

久遠慶子という存在が二人いるということを。

だからこそ。

現実味がなくて、突拍子もないようなことだと解っていながら――榎本恵理華は、それを忘れようとしている。

「……、面白いなあ」

私は、思わず独り言を洩らす。

「久遠さん？」

「面白いですよ、榎本先輩。だって、それが本当なら大変なことでしょう。もし私が本当に二人いるなら、そうだとしか思えない状況が揃っているなら、私がもう一人の私を捕まえればいいんですよ」

それで、全てが解決するのだから。

「一週間前。あの日に出逢ったあの子も言っていたことですよ、榎本先輩。ずっと忘れていたけど、あれは戯言なんかじゃない。あの子はきっと知っていたんです」

「わたくしが夢で久遠さんを見ていたのは偶然ではなかったと、そういうことですか？」

「公園のこともです。少なくともこの公園へこなければ、こんな話はしなかったはずですから」

「そうでしょうか。……いえ、そうかもしれませんね」

榎本先輩はそう言って、立ち上がった。

私の隣を横切って、公園の出入り口まで歩み始める。

「まずは、目撃証言を戴いた生徒達に話を聞いてみましょう。もう一人の久遠さんの行動範囲を把握すれば、見つけることも簡単だと

思いますから」
そう言って榎本先輩は、笑顔を見せた。
――その時。
全てがスローモーションのようだった。
公園から外へ出て、振り返った榎本先輩が笑顔を浮かべた、その瞬間。
「――榎本先輩！！」
聴こえてきたのは、大きなブレーキ音と、衝突音。
真横に跳ねられ飛び散った、榎本恵理華の姿が見えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9212f/

百合物語

2010年10月28日03時49分発行